

研究班番号【60】

## ヨーロッパから学ぶ言語教育

英語班：木原 悠逸 長田 萌 檀野 愛珠

### 要約

本研究の目的は、英語力を上げるにはどのように学習すればよいかを明らかにすることである。日本とヨーロッパ諸国の教育制度を比較した調査により、言語以外のことも同時に学ぶと良いこと、そして、積極的にその言語を用いることが重要だとわかった。従って本研究では、それらが英語力を上げるのに効果があるということが結論付けられた。(本論文中の「英語力」とは、英語運用力のことをさす)

### Abstract

The purpose of this study is to reveal how Japanese people can improve their English ability more effectively. Our experimental survey results show that learning cultural practices and histories of the countries alongside the languages spoken there is essential to improve language ability. In addition, using the languages we learn more actively is also important to acquire language skills. These are the two primary factors we found in this research which may contribute to our effective language learning.

### 1. 序論

ヨーロッパでは何か国語も話す人がたくさんいるというイメージがある。日本人の多くは中学生から、もしくはそれ以前から英語の学習をしているが、高校生になった今でも英語を使えるといえる人は少ない。しかし、日常生活の中で英語はますます必要なものとなるだろう。では、どうすれば英語力があがるのだろうか。そこで注目したのは「学校教育」だ。本研究では、日本の学校とヨーロッパの学校の言語教育を比較し、その違いについて研究した。

### 2. 研究手法

(1) ヨーロッパの特定の国の学習方法を、インターネットを利用して調べる。

(2) Instagram や Hello Talk などの SNS を利用し、実際に日本の言語教育との違い

があるのかどうかを確かめるため、15 歳以上 18 歳未満のヨーロッパの学生にアンケートを取る。

〈アンケート項目〉

- ・いつから英語学習をはじめたか
- ・現在何か国語を学習しているか
- ・自分の英語力に自信はあるか

(3) 比較対象として、日本の学生にも同じ手法でアンケートを実施する。

なお、日本の学生の対象も 15 歳以上 18 歳未満の学生とする。

### 3. 結果

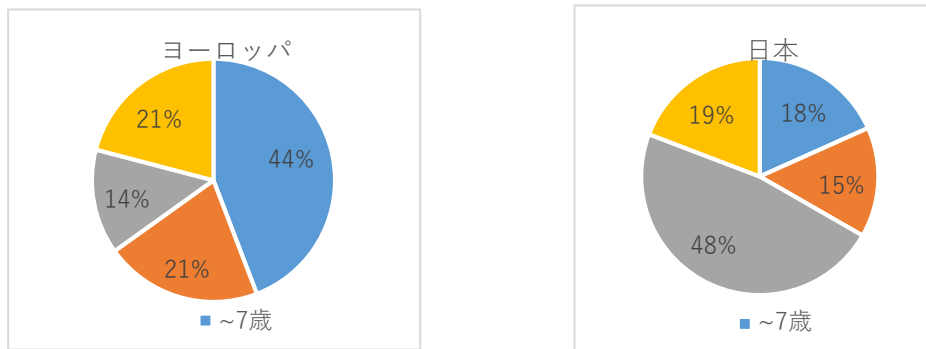
#### (1) インターネットで得た各国の学習方法

複数の国を調べたのち、本研究ではドイツとスイスを例に挙げることにした。その理由は、ドイツでは「Gymnasium」（後ほど詳しく説明する）という教育制度があり、日本と教育制度が大きく違うためである。また、スイスは EF-EPI という英語試験において、2011 年は日本と同じ標準レベルだったのに対し、2020 年の調査では一つレベルがあがっていたためである。EU における「多言語・多文化」主義（杉谷・高橋・伊藤）によると、ドイツのギムナジウム（ドイツでは日本で中等学校に当たる学校の卒業後、専職業専門学校に入学するか、ギムナジウムに入学して大学に進学するかのどちらかを選択するのが主流であるが、ほかにシュタイナー学校や総合学校で進学することもある）では授業で積極的に発言しなければ、単位はもらえず、留年することがあり、習得を目指す言語で歴史や生物などの一般の科目も学ぶ。またその言語が使用されている国の歴史や文化も学ぶ。また、スイスでは、第二言語と同時に幼いころから第三言語としてほかの言語も学んでいる。近年、第二言語の学習開始時期を早めるだけでなく、第三言語の学習時期も早めている。

#### 2) アンケートによる結果

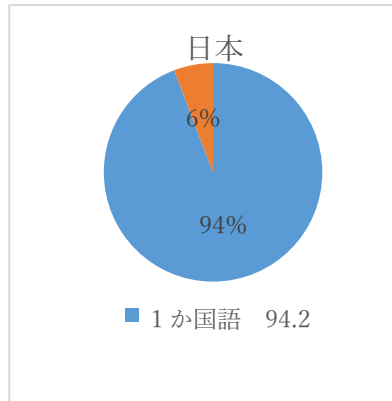
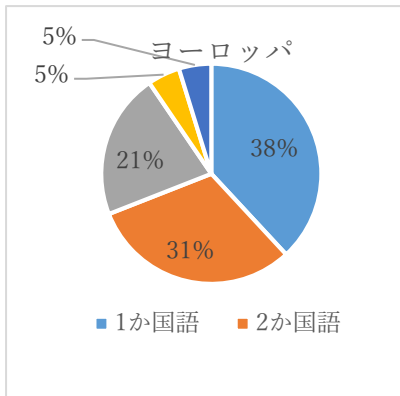
アンケート結果は以下の円グラフのとおりである。

##### ◇ いつから英語学習を始めたか



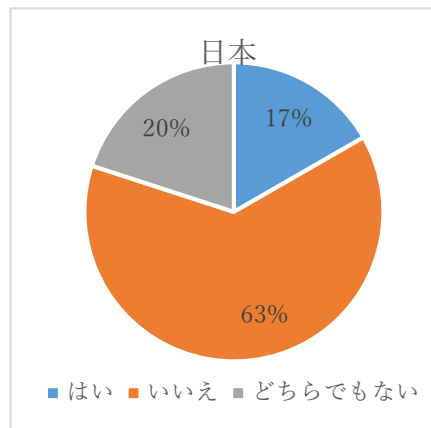
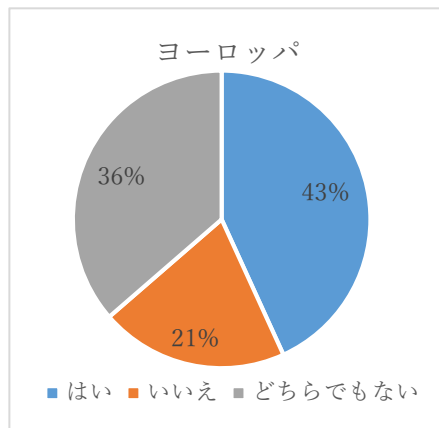
本と比較するとヨーロッパでは比較的小学校低学年までに学習を始めている割合が高いことがわかる。

##### ◇ 現在何か国語を勉強しているか



ヨーロッパでは2か国語以上学んでいる割合が多く占めているのに対し、日本では一か国語だけ学ぶ人の割合が明らかに多い。

#### ◇ 自分の言語運用力に自信はあるか



ヨーロッパでは、自分の英語力に自信があると返答した割合が高いのに対し、日本の学生の過半数が、自信がないと答えている。

## 4. 考察

- ①言語開始時期を早める
- ②一つの言語と同時に他の言語を学ぶ
- ③言語だけでなく、その言語が使用されている国の歴史や文化も学ぶ
- ④自信をもって積極的に話す

本研究によって、以上四項目がより効率よく学習を進められるのではないかと考えられる。従って、日本の学校での英語の授業の早期化、授業教材の見直しが学生の英語力の向上につながるのではないと思われる。例として、授業の本文に歴史や文化的内容のものも取り入れる、英会話や発音を重視する授業を増やす、などが考えられる。

## 5. 結論

考察で提示した項目のうち①から③は学ぶことが多く、すでに忙しい日本の学生にとって実現が難しいと考える。しかし、④は実現できる可能性が高い。臆せず話すことを意識し、英語

を運用することで学生の英語力は確実に上がるのではないかと推測される。

今後の課題は、どのように①から③を実現するかである。また、学習開始時期を早めるとしても、何歳から始めるのがよりよいか、同時に学ぶ言語として適切な言語とは何かなどの点について考える必要がある。

## 6. 参考文献

杉谷眞佐子/高橋秀彰/伊東啓太郎 (2005) 「EUにおける『多言語・多文化』主義  
—複数言語教育の観点から言語と文化の総合教育の可能性をさぐる—」

『関西大学外国語教育研究』第10巻 36-65頁 <http://hdl.handle.net/10112/1457>  
理夢 「10歳で将来の分かれ道?! ドイツの教育システム」 (2018. 1. 19)

<https://kc-i.jp/activity/kwn/rim/20180119/> (閲覧日 2020. 10. 7)

イー・エフ・エデュケーション・ファースト・ジャパン株式会社

「EF-EPI 特別レポート」 <https://www.efjapan.co.jp/epi/regions/europe/switzerland/>  
(閲覧日 2020. 12. 2)